



氷川町・八代市・芦北町定住自立圏構想

3市町では、結婚を望む人の成婚のため、連携して結婚支援を行っています。

素敵な場所で素敵な出会いを見つけませんか

3市町には、豊かな自然、魅力あるスポット、美味しい食がたくさんあります。そのような資源を活かした婚活イベントを、3市町連携で開催しています。ぜひ、素敵な出会いを見つけてください。



▲氷川町チラシ



▲八代市チラシ



▲芦北町チラシ

注意!
これらは既に開催したイベントチラシです。

氷川町の取組み

♥登録制度♥

結婚相手を見つけない人を対象に、婚活イベントへの参加促進のために登録制度を実施しています。

【対象者】20歳以上の独身男女
(男性:町内在住者、女性:町内外問わず)

【登録期間】2年間(更新可)

【特典】①イベントの案内メールが届きます。
②優先的にイベントに参加できます。
③イベントへの参加申込みが簡単です。

♥イベント参加費助成♥

八代市または芦北町が主催・助成する婚活イベントに参加した場合、参加費の半額を助成します。(1人当たり1年度につき2回まで)

♥3市町合同イベント開催♥

平成31年度の婚活イベントは、氷川町・八代市・芦北町で合同開催します。詳細は広報誌やホームページなどで随時お知らせします。

☎ 企画財政課 ☎52-5850

氷川町・八代市・芦北町定住自立圏

イベント情報



日奈久温泉スプリングフェスタ さくらウォーク

日奈久温泉神社の桜が見頃です。春を感じながら登山を楽しみませんか。

◆日時 3月31日(日)
◆場所 櫛山・日奈久温泉神社一帯
◆集合場所・時間
日奈久温泉センター「ばんぺい湯」前
8時30分受付開始(9時ウォーキングスタート)

◆参加料 500円(ちくわ焼き体験・入浴・抽選会引換券付)

※小学生以下は保護者同伴、飲み物、昼食は各自で準備

☎日奈久温泉観光案内所 ☎38-0267



うらら祭り

◆日時 3月4日(日) 9時~16時

◆場所 道の駅たのうら

◆内容
お楽しみ抽選会、振る舞いお菓子プレゼントなど

☎うらら祭り実行委員会事務局 ☎0966-87-2230

町民文芸

短歌

深氷川の環境悪しく変り果て
鴨らの飛来今年も非ず
北野津 宮本 末秋

凝鮒球磨川河口の酒場にて
遠き日の海波は優しき
北野津 井田 道寛

博多座の回り舞台に雪が散る
龍馬が殺陣るおりようが走る
西野津 古崎スエノ

高齢の若き時期吾子思ふ浮ふ
寒明けこの世恵まれる
西野津 古崎 栄子

今年こそ事無き我で有る様に
紅の一角赤くぬりて
南鹿野 尾崎 京子

ふるさとの蟹や鮎等と戯れし
甥の面影氷川に映ゆる
西上宮 村内 一誠

薄倅の娘を語る母親の
泪の跡を我はただ見る
吉本 高瀬 道昭

解体の跡地に高き梅檀の
実はパラパラと春風に落つ
吉本 高橋 澄子

俳句

命終は神のみぞ識る人の世を
悟道求めて我道をゆく
桜ヶ丘 宮崎 敬四郎

苑内で八代訛り飛びかいて
心安らぎ今日も過ぎゆく
上鹿島 前村 俊子

藪陰に恥ずかしそうな紅椿
北野津 宮本 末秋

曲線の影の正しき寒卵
北野津 井田 道寛

愚痴こぼし春の小川に流しけり
西野津 古崎スエノ

七草に願い祈りて。パワー受けたり
南鹿野 尾崎 京子

西晴れてアンテナ高し山眠る
町 香山菊童子

首出して湯舟たっぷり癒しけり
西野津 古崎 栄子

早春やお縁の陽向心地よく
吉本 高橋 澄子

邪念こそ我を去りゆく寒夕焼
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

梅日和言葉交して笑みこぼす
桜ヶ丘 吉田 照子

節分や執着捨てて天仰ぐ
桜ヶ丘 宮崎トシ子

投稿について
・楷書で記入し、漢字には全て読みがなをふって投稿してください。
・内容確認する場合がありますのでお電話番号を明記してください。
・毎月8日必着
※遅れて投稿された場合掲載できない場合があります。
投稿先
〒869-4814 氷川町島地642番地
総務課 行政係 ☎52-71111



春浅き卒寿の小道遠からず
町 田中 澄子

節分や季節外れの風烈し
西上宮 村内 一誠

立春を待たわび聞く豆の花
上鹿島 前村 俊子

漱石と家族と「漱石山房の人々」手探りで『Derrier Memoir』

ここで、ご注進。平成三十年七月十五日、鷗外七歳の写本発見、新聞報道。道徳の教科書「童蒙入學門」の写本が公開された。鷗外直筆では現存する最も古いものとみられる。楷書で丁寧に書かれた漢字である。とても七歳の文字とは、幼いころから神童ぶりを裏付ける資料だそう。

さて、「漱石山房の人々」は、漱石門下生、林原耕三が昭和四十六年に出版した作品。(二八八七生まれ、一九一八年東大英文科卒、在学中から漱石に師事、日本の英文学者・俳人門下生として漱石を正しく後世の漱石研究家に理解してもらうために、小島信夫と江藤淳のはからいで実ったもの。

書店で本を漁っていた折、偶然出会ったのがこれで、タイトルが気に入って手に入れた。数ページ捲って五十年近く眠っていたが、開く時が来た。書く題材を選んできたとき、これが最後になるのならいつそのこと大物を扱った方がと思ひ、鷗外と漱石が浮かんだ。以前、鷗外は「舞姫」を取り上げていたので、ではと漱石になった。厄介なことになった。

二〇一四年、漱石、新聞小説一〇〇周年を記念し当時と同様なレイアウトで連載が始まり、切り抜きを始めた。明治末期という時代の変り目に、四十歳の漱石はなぜ新聞社を選んだのか、東京帝国大学講師の職をなげうって、東京朝日新聞に入社したのは、世間に衝撃を与えた。読売新聞との争奪戦の末の決断だった。

「大学を辞して朝日新聞に入ったら、逢う人が皆驚いた顔をしている。中には何故だと聞くものがある。大決断だと褒めるものがある」

(入社の日 二〇〇七年五月三日東京朝日新聞)